

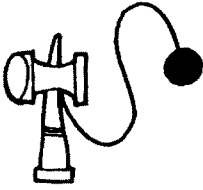
は、執筆者がそれぞれの専門医であるだけに説得力のあるものになっている。また、相馬氏、河内氏が病院の門を出て、教師や親たちと交流し合いながら、それぞれ、高校生や小・中学生の意識調査をされた労には頭が下がる。そこで得られた結果などが、今後、例えば、三沢氏の「子どもと家庭」、鈴木氏の「体力づくり」などのような論考に生かされていくことを期待したい。

最後に、この冊子の編集(馬場賢一氏)だが、医学用語には疎い私たち素人にも飽きさせない配慮が実によくされているということである。文章は全て敬体、欄外に分かり易い小見出し、随所にコラム欄をそう入するなど心憎いまでである。残念なのは、この冊子が一般には市販されていないことであろう。

(岩船郡荒川町金屋小学校)

(注) 連絡先

新潟県医師会 電話二二六三八一(代)



環流

わかりたいという意欲の強烈な表現

佐藤 守正

まなぶ君の文字の習得が一ばん遅れてしまった。彼はがまんが続かない。「ゆ」の文字の練習で、黒板に大きく書く私の手の動きに合わせて、鉛筆を持って挙げた腕を動かす時はおもしろそうにやっていたが、ノートに書く段になると、

「こっけのめんどくせいがはやだなあ。」

とつぶやき始め、三文字はど書くと鉛筆を放り出し、大きなあくびをして、くるりとうしろを向いてしまった。まなぶ君は鉛筆が正しく持てない。指に力が充分入らないため、いつもくねくねと曲がって、終わりの何となく消えているような頼りない線で文字をかく。そんな彼にとっては、「ゆ」のような複雑な線は抵抗が大きすぎるのだ。

休み時間に私はまなぶ君に話しかける。

「まなぶ君、ゆはめんどうだったなあ。まなぶ君はいくつ書いたの？」

「おら、いっぱい書いたよ。」

「そうかなあ、先生が見ていたら、三つくらいしか書かなかったぞ。休み時間にもうちよっとがんばろうか。」

「やだ、やだ、だってばく、くたびれたもん。それ

にすなあそびするよていだもん。」
といいながら逃げだしていく。よていなどという大人びたことばに苦笑しながら、私は、学習から解放されると、とたんに元気になるまなぶ君の後姿を見送っている。

算数の時間。机の上に小さな積木を並べ、十の位の部屋に一本と一の位の部屋に五で15と、20までの数の学習をやっていた時のこと。突然、

「こんげんがはわからない！」と叫んだまなぶ君は、机の上の積木を払いおとしてしまった。またはじまった。しかし、ここでこの子一人にかかわっていると、夏休みまでの予定が終わらない、あとで手をさしおいてやるから今はがまんしろよと思いつきながら、

「次は、18を作ってみましょう。」と彼を無視して学習をつづけた。ひらがなの学習はともかく、加減算だけはよくわかるという自信は持っていたまなぶ君だけに、算数もわからなくなってきたことに耐えられないのだろう。その上無視されたとなったら、もうがまんできない。隣近所の子の積木まで払いおとし始めた。私も放っておけなくなつて、

「まなぶくん、やめなさい！」と叱りながら彼の手を引っぱってきて、

「あとで教えてあげるから、ここで待っていなさい。」と教室のわきに坐らせようとした。とたんに彼は、



ワアッと大声で泣き出し、ひっくり返ってしまった。こうなればもう教室は騒然として授業は続けられない。

「ちょっと早いけど、これでおしまい。先生はまなぶくんとお話ししてくるから、みんなは給食の準備をしておきなさい。」

といい残して、私はまなぶ君をだき上げた。はじめはバタバタと暴れていたが、ギュッと強くだきしめると、すぐおとなしくなり、私の胸に顔をうずめて泣きつづける。体育館のわきのひんやりとしたコンクリートの上に彼をおろし、二人で並んで坐った時には、もうすっかり泣きやんでいた。

「先生は、まなぶくんの気持が、よくわかるなあ。今の時間は、わからなくてせつなくなっただろう。」

「うん。」

「みんながわかるのに、ぼくだけわかんなくなっただけ、悲しくなっただろう。」

「でも、あんなことしちゃだめだぞ。ぼくわからなくなったら、と先生に言えればいいんだよ。」

この日の昼休みは、砂あそびにも行かずに、まなぶ君は一所けん命に積木を並べ、数字を書いた。

一年生のわかんないという要求は強烈だ。それだけに、わからなくなっただけの時つなごの表現も直截である。泣いたり、すねたり、粗暴になったりなど、全身でわからせてくれと訴えてくる。しかし、そう訴えても、かんだんには応えてもらえない現実につかりぶつかりしているうちにだんだんあきらめ、このまっとうな要求を表現しなくなっていく。そして、わかりたいという要求もしぼませていくのだらう。そんな中・高学年を担任しつつきてきた私にとっては、このわかりたいという意欲を強烈に表現する一年生の姿は、まさに新鮮、感動的ですからある。その要求に応えることの難かしさにとまどいながらも、

一年生っていいなあと思っているこの頃である。

(南魚・六日町・城内小学校)

「出稼ぎをみる子ども目」

村上 紘

東頸城郡では、また出稼ぎの季節がやってきた。家庭とは、安住の場であり、明日への活力をやしなう場なのに、一家の大黒柱の父親(中には母親までも)を半年も出稼ぎにとられ、家族がバラバラに生活をしなくてはならなくなってきている。そんな「出稼ぎ」を、子どもは、次のようにみる。

1. 出稼ぎにでかける前

「出かせぎ」 六年 佐藤千津江

「ねら、かあちゃん、大阪へ働きに行っているかい。」と、おかあさんが言いました。冬は仕事がないので、また大阪へ出かせぎに行こうか、というのです。わたしは、

「行っても、いいよ。」

と、答えましたが、でも行ってはしくない気もちもありました。しかし、土かたに出るよりは、大阪へ行った方がよいと思うのです。わたしは、去年おかあさんが、雪のふる寒い日に、土かたから帰ってきた時、はなみずがこおっていたのを見ました。(後略)

2. 出稼ぎにでてから

「おこりっぽくなっただかあちゃん」五年女
とうちゃん
でかせぎに行っているから
かあちゃん
きゅうに おこりっぽくなった。

ちょっとしたことで、すぐおこる。

きのうだって、そうだ。

さいほう道具、しまいわすただけなのに、ものすごく、おっかない声でおこる。

今まで

こんなことなかったのになあ。

江戸時代にもあった出稼ぎ、今は、父・祖父だけでなく、母親までも出稼ぎに行く。そして、出稼ぎ先でみつけた「安住の地」に、郷里を離れて生活する。過疎が、どんどん進行していく。今年も、また出稼ぎの季節がやってきた。

紙面がたりず思うように書けません。

「出稼ぎ」の作文や詩はまたたくさんあります。

1. 出稼ぎに出かける前

2. 出稼ぎに出かける時

3. 出稼ぎに出てから

4. 正月、出稼ぎから帰ってくる

5. 留守を守りがんばりぬく母親

6. 母親と共に留守を守る子どもたち

7. 愛する夫へのある主婦の手記

8. ふるさとを想う出稼ぎ労働者の手記

9. 出稼ぎの原因とこれから

こんなふうに、たくさんありますが、書けません。詳しくは、第25次全国教研の私のレポートをみて下さい。貴研究所の今後の活躍を期待しています。

(東頸・松之山町松里小学校)